

〈論文〉

**Who was John shot kissing?* はなぜ許容されないか。

葛 西 清 蔵

0. つぎの (1a), (2a) に対する (1b), (2b) は許容されない。

1. a It is fun kissing Gladys.

b **Who* is it fun kissing?

2. a John was shot kissing Gladys.

b **Who* was John shot kissing?

(1b), (2b) の非文に共通の理由はないか。この問題の検討の第一段階として, (1b) の非文の理由を葛西 (2007) にまとめた。本稿は, (2b) の非文の理由を述べ, できれば非文である (1b), (2b) 共通の理由がないかを探ろうとするものである。

1. (1b), (2b) のように文の要素を WH として移動させる場合の可否については, まず「付加部条件」を取りあげなければならない。(3a, b), (4a, b) の例を見よう。

3. a *Who* did you meet t at the station?

b *Where* did she put the book t ?

4. a **What* did John leave [before fixing t]?

b **Which city* did you meet the man [from t]? (安藤・小野 1993)

(3a, b) のような「補部」(complement) の部分からの抜き出しは可能であるが, (4a, b)

のような「付加部」からの抜き出しは不可能である。これが「付加部条件」であるが、さきに見た (2b) の非文はこれと関係があるのであろうか。(2a) の *kissing Gladys* が「付加部」と関係があるのであろうか。まずつぎの文をみよう。

5. a **Which city* did you meet Mary [*in t*]?

b *In which city* did you meet Mary [*t*]?

(5a) では「付加部条件」によって許容されない文となっているが、*in* に随伴 (*pied piping*) させて、「付加部」全体を移動した (5b) では許容されている。これはどういう訳であろうか。さらにまた、つぎの例に関係はないであろうか。

6. a **Which city* did you meet Mary [*in t*]? (= 5a)

b *What conclusion* did John arrive [*at t*]?

(6a) は「付加部条件」で非文になるが、これに類する (6b) が非文にならないのはなぜか。理由を先どりして言えば、統語的には許容されないはずのものが許容されるのは、*arrive at* が意味的にまとまりをなし、一つの「意味的単位」(*semantic unit*) (Siegel 1983:186) となっており、いわば *arrive at* = *reach* のように、一つの他動詞のようになり、結果的に、*what conclusion* が「補部」のようになっているからである、といえる。つまり、「付加部条件」には意味的なものが関わっていることになる。しかも、意味的なことが原因となり、「付加部」の一部を「補部」に、いわば「再分析」した形になっている。

この種の問題では「意味的なまとまり」が重要であることからわかる。(5a) が非文なのに (5b) が許容されるのは、(5b) で、*in which city* は全体でまとまりをなし、この文での機能がはっきりするからであると予想をたてることができる。

「補部」とは、もともと動詞に不可欠の部分であり、「付加部」は修飾的な役割をする部分であるから、(6a, b) は、「動詞との関係がはっきりしているものは移動ができる」ということを示しているともいえる。英語はもともと語順に、文の要素の「主語」、「目的語」などの重要な機能をまかせている言語であるから、ことのほか語順に依存する言語であることを考えると、「移動した要素の機能がはっきりしなくなるような移動は許さない」ということは十分ありうることである。以下ではこの視点から、表題の問題を考える。

2. 1章で見た視点から、ここでは、WH 移動が許されないさまざまな場合を見ることに

**Who was John shot kissing?* はなぜ許容されないか。

する。まず (7a, b) を見よう。

2.1 7. a **Which book* did you meet the man who wrote t ?

b ***Which author* did you read a book which t wrote?

(7a, b) の例は、関係節の中から要素、((7a) では関係節の目的語, (7b) では関係節の主語) を WH として文頭に移動したものである。これは「複合名詞句制約」(complex NP constraint) とよばれているものである。さらにつぎの例を見よう。

2.2 8. a **Who* did a picture of t please Bill?

b **Why* is that he left t obvious?

c **Who* does it seem that friends of t will be late?

(8a, b, c) は主語の一部を WH として抜き出したもので、いわゆる「主語名詞句制約」(subject NP constraint) である。

2.3 つぎの例は、間接疑問に関するものである。

9. a **What* did you wonder who saw t ?

b **Who* do you know what t saw?

c **Why* do you wonder who left t ?

(9a, b, c) はいずれも間接疑問の要素を文頭に抜き出したものである。いわゆる「WH 島の条件」(wh-island condition) といわれるものである。

2.4 つぎの例は副詞的要素に関するものである。

10. a **What time* did John fix the boat at t ?

b **Which dog* did you find the money walking t ?

副詞的な要素であるから、当然、動詞にとっては従的な要素であり、不可欠なものではない。上で見てきた (7a, b), (8a, b, c), (9a, b, c), (10a, b) の非文に共通に見られる性

質は何であろうか。

まず、いえることは、「移動された要素はいずれも（主節）動詞から関係が遠い」ということのようなのである。(7) では、移動されている部分はいずれも目的語名詞句の修飾部であり、主節動詞からの距離は遠い。(8) では、主語名詞句の修飾的な部分の一部が移動されており、(7) の場合と同じように、移動された部分は主節動詞から遠い。(9) では、目的語となっている疑問文からの抜き出しである。さらに、(9) では、副詞的な部分であるから、主節動詞からは遠い関係にある。Haiman (1983 : 782) には、「表現の距離は、概念上の距離に対応する」(‘linguistic distance between expressions corresponds to the conceptual distance’) とある。関係の深いものほどちかくなる、のである。

こうして見ると、動詞を中心にして、主語、目的語、さらに補語は動詞に対して深い関係にあるが、これらの関係はつまるところ語順によって示されている。英語の特徴の一つは「固定された語順」(fixed word-order) であるといわれるのもこのためである。この動詞との関係が明らかな要素は、移動されてもほかの要素との関係で、その機能が明解である。

11. a *Who* *t* gave you the book?

b *What* did John give you *t* ?

(11a, b) では *who*, *what* の機能ははっきりしているが、(7), (8), (9), (10) でみてきたような例では、それぞれの名詞句の内部の要素のことで主節動詞からもう一段関係が薄くなる。これらの要素はもはや主節動詞の影響の及ばない領域にある。このように主節の動詞との関係がはっきりしない要素は移動はできない。その理由はただ一つ、その文のなかでの機能が明確でなくなるから、ということであるはずである。(語尾変化のはっきりしているドイツ語、古英語では、語順移動がかなり自由であることが傍証になる。)

上の (7), (8), (9) は Ross (1967) の「島」(island) といわれるもので説明されるものであるが、後に「障碍」(barrier) という概念でかわられる。これは概略、要素 A, B の間に R という関係がある場合、この R を邪魔する範疇のことであるが、この「邪魔をする範疇を二つこえてはいけない」とする。「下接の条件」(subjacency condition) といって、この邪魔をする範疇を一つ越える場合しか許容されない。これは、各要素の機能が不明になるような語順の移動をとめる、と言っているかもしれない。

しかし、統語的な方法で説明しようとするこのような方法では、解決できない例があることもまた事実である。上で見た (7), (8), (9) のような、条件、制約のほかに、

12. a *What sofa will he put the chair between [some table and t]?
b *Tomorrow, I might go to the movies, [today or t].
c It's a bottle of gin that John [went to the store] and [bought t].

(12a, b) のように、等位接続された要素の一部に移動を許さないとする「等位構造制約」(coordinate structure constraint) があるが、これには (12c) のような反例がある。どのような場合に許容されるのであろうか。ここでは *went to the store and bought* は「自然なつながり」である。意味的につよいまとまりをなしている場合には、一つの統語的単位として振舞うのである全体としては、各要素の機能を不明にするようなことはない。このことは、すでに見た (6b) の例でも確認できる。統語現象を扱う際に、このことは軽視できない。これもまた、英語の構造は、意味的に問題がないかぎり、基礎的な語順にそって処理をし、解釈しようとするようである。そうであればこそ、

13. a *Who* can we trust?
b *Who* do you think you are speaking to?

(13a, b) のように、文法的には *whom* であるべきなのに、おそらく文頭であるために *who* が許されている現実がある。

3. 2章では、英語に見られるさまざまな現象は、統語的な機能が明確であるかぎり許されるのではないかと、いう予想を導きだすことができることをみた。要素の移動に限って言えば、

「移動された要素の機能が明確であるかぎり許容される」

ということになる。つまり、主節の動詞との関係がはっきりし、関係が強いものほど、要素の移動は許される、ということになる。逆にいえば、「主節動詞との関係が希薄なものほどその要素の移動は許されない」ことになる。つぎには、このことをふまえて表題の問題を検討したい。

14. a John was shot kissing Gladys. (= 2a)

b *Who was John shot kissing t ? (= 2b)

(14a) の意味は「Gladys とキスをしている時 John は撃たれた」であろう。John was shot で意味的には完結しており、「Gladys とキスをしている時」というような時, 場所, 方法を表わす表現がくるとしても, それは修飾的な部分である。もしこの文を「John は Gladys とキスしているところを撃たれた」のように解し,

15. Which dog did you catch Marcia walking t ?

(M. がどのイヌを散歩させているところを君は見たのですか)

(15) との類似性に注目することも可能であろう。しかし, (14a) は, さきに見たように「John は撃たれた」で完結した文で, kissing Gladys はこの文の必須の部分ではない。これに対して, (15) は, 'catch + 目的語 + ~ing' で「-- が~しているところを (たまたま) 見る」という意味であり, ~ing は「目的補語」(荒木 1996 : 419) で, 動詞にとって必須の要素である。だからこそ, この部分から which dog として抜き出しも可能である。

しかし, (14a) では, kissing Gladys の部分は, 「分詞構文」(荒木 1996 : 419) であり, 文全体の中ではあくまで従的な部分であり, Gladys を who として抜き出しはできない。

4. 3章では表題の文の非文の理由を明らかにすることができた。2章で見たように, 要素の移動が可能なのは, その要素が主節動詞との関係がはっきりしており, 移動された後でも, その移動された要素の機能が明白である場合にかぎる, ということであった。つまり, 表題の文が許容されないのは, この文にとって必須でない, 修飾的な要素である部分から, その一部を移動することにより, その移動された要素の機能が不明になる, ということが原因である, ことが明らかになった。

最後に考えなくてはならないのは, 表題の文と, (1a, b) としてあげた文 (ここで (16a, b) としてくり返す) との関係である。

16. a It is fun kissing Gladys (= 1a)

b *Who is it fun kissing? (= 1b)

(16a, b) の文について, 葛西 (2007) ではつぎのように結論した。つまり, (16a) にお

いて, *kissing Gladys* は *It* の内容を繰り返した, 古い情報の部分であり, この文の前提部分である。前提部分に疑問を発することはありえないことから, (16b) は許容されない, とした。

そして, 本稿では, 表題の文, **Who was John shot kissing?* の非文性について, 当の文の主節動詞との関係の薄い修飾的な部分 *visiting who* の中の要素の移動は, その統語機能が不明になるので許容されない, と結論した。

ここで, ようやく (1b), (2b) としてあげた二つの文,

17. a **Who is it fun kissing?* (= 1a)

b **Who was John shot kissing?* (= 2b)

の非文性に対する理由が明白になったといえよう。つまり (17a) では, *who* は, この文の補足部分で, 単に主語 *It* の繰り返しである部分の一部である。古い情報部分に疑問を発することはありえない。

また, (17b) の *who* は, *was John shot?* という主要部分の補足部分をなす, 分詞構文 *kissing who* の一部である。「その文の主動詞にとって, 必須でない要素を疑問にして移動することはない」ということであることから (17b) は非文となる。(これはまさに「付加部条件」の主張するところであるが, この条件の問題点については葛西 (2006) を参照されたい。)

(17a, b) が許容されない共通の理由を, ここでいうとすれば, それは, 「その文の主節部分と関係のうすい, 補足的な部分に, その一部の要素を移動させるなどは許されない」ということになるであろう。

参 考 文 献

- 安藤貞雄・小野隆啓 1993 『生成文法用語辞典』大修館書店
荒木一雄 (編) 1996 『現代英語正誤辞典』研究社出版
Haiman, J. 1983 'Iconic and economic motivation' *Lg.* 59: 782-819
葛西清蔵 2006 「「付加部条件」は何であったか。」『文化と言語』65: 11-29
葛西清蔵 2007 「**Who is it fun kissing?* はなぜ許容されないか。」(本号)
Ross, R. 1967 *Constraints on Variables in Syntax* Indiana Univ. Linguistics Club
Siegel, M.E.A. 1983 'Problems in preposition stranding' *LI* 14-1: 184-188